

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第159号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成22年3月21日

ハイイロチュウヒ



2009. 2.16 沙流郡日高町富川

撮影者 道川 富美子 (石狩郡当別町)



も く じ

津軽海峡を渡る鳥たちについての独り言	市立函館博物館 佐藤 理夫	2
ベニヒワとコベニヒワ	美唄市 藤巻 裕蔵	8
野幌森林公園雑感—フクロウとクマゲラー	江別市野幌 松原 寛直	9
風車と野鳥	北海道鳥類保全研究会 (代表) 東京農業大学生物産業学部 白木 彩子	10
絶滅危惧種シマアオジをどう守るか(6)	IUCNのレッドリストに掲載されたこと 北海道環境科学研究センター自然環境部 玉田 克巳	12
デジカメ今昔	札幌市南区 小堀 煌治	13
探鳥会ほうこく		14
鳥民だより		15
宿泊探鳥会のお知らせ		15
探鳥会あんない		16

津軽海峡を渡る鳥たちについての独り言

市立函館博物館 佐藤 理 夫

はじめに

ここでは、津軽海峡を渡る鳥たちについて、独断と偏見を交えて選り出し、独り言として、学術的なことは度外視して紹介したいと思います。内容的には、物足りないこともあるでしょうし、間違ったことも言っているかと思いますが、鳥好きの戯言としてお付き合い下さい。

アカエリヒレアシシギの群が函館沿岸に来たる

競輪場から、「ナイター競輪の最中に、鳥が群れで飛び回り、照明にぶつかるので困っているのだが、何とかならないか。」と言う内容の電話が、私のところに今年も来ました。〈今年も来た〉というのは、毎年のことではないのですが、この時期になると電話がかかってくるからです。毎年でないため、担当者が変わると、引き継ぎがされていないためなのか、それとも私に連絡すれば何とかかなと思っているのか、必ずと言っていいほど同じ問い合わせの電話がかかります。さらに続けて、「照明に衝突し落鳥した個体を見てほしい。」と言うのです。アカエリヒレアシシギということは分かっているのですが、もしかしたら違っているかもしれないの思いもあり、必ず確認するようにしています。しかし、当然のことながら判断ミスはないです。そこで、同じ答えを返します。「どうにもなりません」と。担当者はがっかりするのですが、もう一つ続けて、「いつもあることですが、しばらくするといなくなりますよ。」と。とたんに、安心したように、笑顔となり、今後の経過を見るということで、一件着落です。同じシーズンでのこの種の問い合わせの電話は1件もありません。

アカエリヒレアシシギは5月～6月にかけて函館湾～下海岸の函館沿岸に集まります。

立待岬の側にある住吉墓地から大森浜全面に広がる海面を見ていると、オーバーに言えば、海面を埋め尽くすのではと思われる時があります。そして、まるで何もなかったように、いつの間にかいなくなるのです。そして、思います。「ナイター競輪がある以上は、また電話が来るのかな～」と。

ヤマシギは夜に歩く

北海道では夏鳥で、広く分布しているのですが、この鳥の道南での渡りの時期は明確なものではありません。この鳥は、歩いていると、突然草むらから飛び出すことが多く、こちらが「何か？」とびっくりしてしまうことがしばしばです。皆さんも、そういう経験をしたのは1度や2度ではないでしょう。休んでいたのか？何をしていたのか分かりませんが？突然飛び出したヤマシギは、人がその他のモノが近づいてくるまで、じっと静かに草むらに隠れていたのでしょうか。

しかし、夜の行動は、それとは異なります。好きこのんで、夜中に函館山に行く人はいないでしょうが、9月下旬から10月中旬の夜間か早朝に、函館山の尾根筋の道路上でこの鳥が右に寄ったり、左に寄ったりしている姿を見ることが出来ます。多分、餌となる虫などを探しているのでしょう。少なからず、一時期、函館山を通過途中に、少しの間滞在して、ほとんど交通量のない尾根筋の道路上で餌を探しているのか、点々ととどまっている様子を見ることが

できます。近づきすぎず、驚かさなければ、その行動をじっくり観察するすることができます。

オオコノハズクは渡る

オオコノハズクは全国に広く分布し、留鳥とされているのですが、北海道の個体は南下することが分かってきています。しかし、道南地方で繁殖しているかどうかは分かっていません。12月中にけがをして確認された個体もあり、近郊では越冬しているのかもしれない。渡りの多くは10月中旬から11月下旬頃まで続きます。この時期は、函館市内や近郊で保護される個体が増える時期でもあります。道南地方では、ちょうど小鳥類の渡りの最盛期に一致しているため、小鳥類を追いかけて移動していると考えられています。ちなみにコノハズクの渡りは8月下旬～10月中旬です。

ところで、函館山で実施した鳥類標識調査（バード・バンディング、以降バンディングと呼ぶ）でも一晩で6羽を記録したことがあります。これは、昔のことと思われる程、現在は、松前町白神天狗山中腹（以後「白神」と呼ぶ）で、その多くが記録されます。さらに、2002年11月4日に白神で放鳥した個体が翌年の3月5日に山形県東根市神町にて回収されています。さらに、2003年10月4日に放鳥した個体は2005年3月21日に三重県久居市西鷹跡町で回収されています。北海道のオオコノハズクは東北以南、さらには西日本まで南下しているようです。これらの個体は越冬中だったのか、北上途中だったのかは不明ですが、3月ではまだ、北上していないことは明かなようです。

函館山の春季の渡りについては、放鳥記録がないため不明ですが、1990年11月1日に函館山で放鳥された個体が、1992年5月8日に函館公園内で保護されたことがあります。

ルリビタキは群来す？

「青い鳥」と聞いたら、皆さんならどんな野鳥を思い浮かぶでしょうか？ルリビタキ？コルリ（ツグミ科）？それともオオルリ？私なら即座にルリビタキを選びます。これらの野鳥は、いずれも雄が青色を帯びていて美しいのですが、とりわけ私には、ルリビタキが最も美しく感じます。

3種の雄の体色は、生まれた年（1年目）の秋には、雄成鳥の特徴である青色を体の一部に持つのですが、大部分は雌に似た地味な色をしています。例えば、ルリビタキの雄の幼鳥は、小雨覆の羽（翼上面の付け根にある羽）が青色を帯びるのですが、背面はオリーブ褐色をしています。

翌年（2年目）の春になると、3種とも繁殖年齢となり

ます。オオルリとコルリは、この時、幼羽を部分的に残しているものの、全身の羽はほとんど成鳥と変わらない青色となります。一方、ルリビタキの雄は、1年目の秋の体色のままです。

では、ルリビタキの雄の背面が青色を獲得するためにはどれくらいの年月がかかるのでしょうか。はっきりしたことは分からないのですが、強いて言うなら、3年目の秋に淡い青色を帯びるようになり、それ以降に、「成鳥羽」という、限りなくオリーブ褐色の混じらない様な青色（これを称して「決定羽」と呼ぶ）になると考えられています。ここで「限りなく様な青色」と言ったのは、「様な青色」はほとんど無いからです。このため、きれいな青色を帯びた個体に出会うことは非常に難しいことなのです。

さて、このように、オオルリとコルリは2年目の春に、ルリビタキは3年目の秋に、ほぼ青色の体色になります。どうしてルリビタキの羽色が「成鳥羽」を獲得するのに時間がかかるかについては、まだはっきりした理由は明らかになっていないようですが、森本元さんが『ルリビタキの若い雄はなぜ雌に似て地味なのか？』（BIRDER 23(6) 2009)の中で解説していますので、参考して下さい。

いずれにしても、ルリビタキのように、きれいな衣を身にまとおうのには、幸せを追い求めるのと同様に時間がかかるのかもしれない。

さらに、ルリビタキは、オオルリとコルリのように繁殖のために函館山にやってくる夏鳥と異なり、春と秋の一時しか姿を見せません。このうち特に晩秋がすごいのです。10月中旬以降の函館山は、あまり綺麗とはいえない紅葉が終わりを迎える頃ですが、この頃からルリビタキが姿を見せ始め、10月下旬から11月上旬が最盛期を迎えます。このときの状態を称して、多少大げさに言うと、ルリビタキの群来と表現出来るかもしれません。それくらい多数が函館山に集合します。私はこの函館山以外で、渡りの途中に多数の個体を見ることが出来る場所は、松前町白神しか知りません。

ルリビタキは函館山でも白神でも繁殖も越冬もしないため、渡るコースの中継地として意識的に選択しているように思えます。

また、異なるのは、青い「成鳥羽」をもつようになった雄の個体の出現が函館山の方が多いということです。

さて、過去の回収記録を見ると表1のとおりとなります。函館山で放鳥されたルリビタキが初めて回収されたのは宮崎県でした。これほど長い距離を渡っているとは私の想定

表1 函館山・白神におけるルリビタキの放鳥・回収記録

	放鳥日	性別	年齢	放鳥場所	回収日	回収場所
①	1981/10/27	雌	幼鳥	北海道函館市函館山	→ 1982/02/06	宮崎県南国市桑の川
②	1989/10/21	雄	幼鳥	北海道函館市函館山	→ 1989/10/28	山形県酒田市飛鳥
③	1989/11/01	雌	幼鳥	北海道函館市函館山	→ 1989/12/14	愛知県豊田市長根
④	2000/10/14	雌	幼鳥	北海道根室市東梅	→ 2000/11/06	北海道松前郡松前町白神天狗山

外でした。

ルリビタキは本州では、「漂鳥」とされています。それは、「本州においては、高山で繁殖した個体が、低地に降りて越冬する」と言われていたからです。上記の例は、『わたり鳥』（吉井正 1979）によれば「本種が1年を通じての移動が垂直的なもの」ばかりではなく、北～南への平行的なモノがいることを意味しています。

さらに、函館山と飛鳥は直線距離で300kmですから、7日間といえば、1日に約40kmを飛んでいることになります。松前町白神岬（以後「白神岬」と呼ぶ）と津軽海峡を境にした対岸の竜飛岬の距離は約30kmですから、危険性を度外視するとまさしく楽に飛んでいける距離ということになります。さらに、この表には記載していないのですが、函館山から白神岬への渡りも確認されていることから、函館山から直接津軽海峡から本州というコースでなく、一旦津軽海峡沿いを白神に向っているようです。道南からの本州への回収例は多いとは決して言えないため、断定できるモノではないのですが、もっぱら日本海側を北上しているように思われます。ただ、道南地方の春の記録については、秋に比べてそれほど多くはありません。日本海側の離島での記録が多いことが報告されています。

それともう一つ不思議に思うことは、20年間で3,000羽を超える数を放鳥しているにもかかわらず、函館山でも白神でも、同じ個体が翌年以降に、再捕獲されることがないのです。このため、もしかしたら年齢により渡るコースを変えているのか、最近は思うようになってきています。これは、筆者にとっては解答のない永遠の謎のように思われます。

ウグイスの雄は辛いよ

ウグイスは、皆さんも知っているとおおり、北海道では夏鳥ですが、本州では留鳥です。3月、ウグイスは立待岬から函館に入ってきます。このとき、やってくるのは雄です。この雄は4月中旬頃から囀り（さえずり：繁殖期に主に小鳥類の雄が発する複雑な鳴き声。時々雌も発することがある。）始めます。「ホーホケ」と、まだ「ホーホケキョ」とは完全には囀らず、「チャ、チャ、チャ」と地鳴き（じなき：囀り以外の鳴き声。囀りと異なり単発の短い声。）が響きます。ところで、以前、函館山には不思議な囀りをする個体がありました。それは「ホーホケキョボ」と「キョ」のあとに「ボ」という音が入ります。10年ほど前には毎年この鳴き声を聞くことが出来ました。この鳴き声をする個体は、函館山の旧山道沿いの3合目の沢沿いで、林全面にササの生えた明るい場所の、いかにもウグイスがいそうな場所にいます。ところで、この鳴き声は、同じ個体が鳴くのか、また、この場所に生息するものの固有の鳴き声かどうかは分かりませんが、とにかくこの鳴き声が聞こえていましたが、現在も同じような鳴き声が聞こえるかは確認していま

せん。ところで、他の場所でもこの方言(?)のような鳴き声が聞こえたら教えて下さい。

話を元に戻しましょう。ウグイスの雄の話をしました。雌はいつ渡来するのかというと、5月下旬以降です。つまり、早くに渡来した雄から1ヶ月ほど遅れて雌がやってくることになります。

函館山で行った1989年と1993年の鳥類標識調査（バンディング）で、性別の割合を検討したことがあるのですが、前半は雄が多く、後半は雌が多い傾向になりました。つまり、春季には、雄が先に渡りを始めた後、しばらくして雌が渡り始めるのでしょう。これは、すでに、飛鳥でも知られており、松前町の白神でも同じ傾向を示していました（図1）。

雌がやって来る時期は、丁度、雄の囀りが喉試しから、本番を迎えた頃です。つまり、雄がくなくばり>の争奪戦をしているときに、雌が雄の品定めにやってくるのです。ところで、同じ姿をしていて、どうして雌雄が区別できるかって？それは、雄が雌より小さいことで分かるのですが、ただし、目視だけの観察では難しいでしょう。

夜渡るムシクイ類

5月になると「焼酎一杯グイー」と聞きなす（鳴き声を意味のある言葉に置き換える）ことのできるセンダイムシクイがやってきます。

さて、毎年6月上旬になると必ずと言っていいほど、「ジジロジロジロ」とか「ジョジョリジョジョリジョジョリ」と鳴く鳥がいます。メボソムシクイです。毎年、6月上旬にこの鳴き声を聞いていたのですが、最近では鳴き声を聞くことは無くなりました。ところで、この鳥は、正確に言うと、「チョリチョリチョリチョリ」と鳴き声が「銭取り銭取り」と聞こえることから、以前は、メボソムシクイとは亜種関係にあるコメボソムシクイと呼ばれていましたが、現在はオオムシクイではないかとも言われています。毎年、同じ頃、北への渡りの途中に函館山に立ち寄ってい

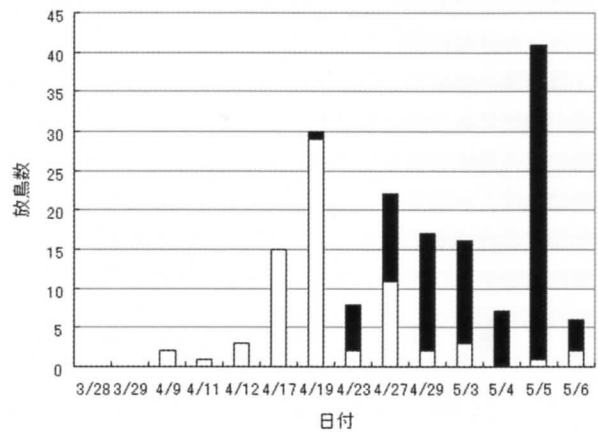


図1 白神におけるウグイスの性別放鳥数の日変化(1998)。黒ぬりは雌を、白ぬりは雄を示す。



メボソムシクイ

たのです。

さて、ムシクイ類は姿、形がよく似ているため野外での区別は大変難しいのですが、同じ仲間でもエゾムシクイは4月下旬～5月上旬に一時的に姿を見せるだけですから、あとはすでに夏鳥として函館山に生息しているセンダイムシクイとの区別さえ知っていれば難しいことはありません。センダイムシクイはやや黄色味がかっており、頭の中央に白っぽい線がありますから、この特徴を確認できたらしめたものです。反対にその特徴がなければメボソムシクイになります。しかし、この方法はエゾムシクイが普通に生息しない函館山だけで当てはまることです。

8月ともなると、もう夏鳥の渡りが始まります。まだ時間があると思ってのんびりしてはいられません。すでにムシクイ類が群れているのが見られます。これらの群は、20年ほど前までは巣立ち後に群れる家族群と思っていましたが、現在は、渡り途中の群であることが分かってきました。それらはセンダイムシクイとエゾムシクイが混群をつくっていることが多く、どちらかとは区別しづらいのです。この時期以降の季節では野鳥を見分けるのは春ほど容易ではありません。なぜなら、鳴き声も地鳴きという、地味な鳴き声になるためです。

林吉彦さん(故人)は、林の中で、高く飛ぶのはセンダイムシクイ、低く飛ぶのはエゾムシクイではないかと言っていました。これは、8月に行った白神でのバンディングで、3m以上に高くした網にはセンダイムシクイが、それ以下の網にはエゾムシクイがより多くかかるためです。

両種とも北海道に繁殖のためにやってきます。この2種については、放鳥数が少なかったため、渡りに関する情報は少なかったのですが、8月に白神で行われた1991年から始められた調査により、両種の秋の渡りが8月中旬に、さらに、早くて7月中旬以降にあることが明らかになっていきます。

このころ、夜中に耳を澄ますと、空から「チッ」「チッ」「チッ」と鳥の音が聞こえてきます。センダイムシクイやエゾムシクイ等が渡って行くときに発する声です。このことから、白神の環境省のステーションの拠点として使用している小屋の名を「啼星(ていじょう)小屋」と山階鳥類



センダイムシクイ

研究所の佐藤文男さんが名付けたほどです。何故鳴くのかはよく分かりませんが、2008年から林吉彦さんを代表とする道南バンディング研究会がこの声を記録することで、多数のムシクイ類が夜中に飛んでいることが分かってきました。この点については、後日、改めて報告できればと考えています。

9月中旬頃からまたムシクイ類が動き始めます。この頃、8月盛んに渡りをしていたエゾムシクイやセンダイムシクイはすでにいません。ではなにがいるかということ、メボソムシクイです。そう、6月に函館を通過していた種類です。ですから、この頃のムシクイ類といえば、メボソムシクイと思って間違いないでしょう。

さて、春については、前述の通り、それぞれの個体が囀り始めることで、その種の渡来が分かると言った具合で、渡りについてはよく分かっていませんでしたが、ここ10年の内に、大きな群が、渡島大島などの離島を中継地に北上することが分かってきました。日本沿岸唯一の無人島である渡島大島での、この島の東側にわずかに残るイタヤカエデの木の中に居たときのセンダイムシクイの群との遭遇は、感動的なモノでした。

センダイムシクイは渡りの途中の休息場として、イタヤカエデの林を目標に次から次へと飛び込んでくるのです。疲れ果てているためか、人を人とも思わず、木の一部と思うのか、考える余裕がない様子で、筆者がじっとしていると、片腕に止まろうとするのです。こちらは、この様子が続く限り、ただ息を凝らしてジッとするのみです。

キクイタダキは渡る

キクイタダキは留鳥として区分されているのですが、鳥口進さん(函館市在住)の函館山でのバンディング結果から10月上旬から下旬にかけて多数が集まり、渡りをしていくことがある程度分かってきました。つまり、本種は、針葉樹の枝先を縫うようにして移動する習性のため、尾根筋にある樹木があまり高くない地点での調査がより有効であることを示唆しています。さらに、過去の全国のバンディングで放鳥数が少なかったのは、函館山でバンディングが行われてなかったためです。つまり、本種の個体数が少な

かったのではなく、かなりの数が函館山より温暖な地に移動するために津軽海峡を渡っていると予想されます。

キクイタダキはヒガラの群れに混じりスギに集まっています。スギのタネは、彼らにとって貴重な栄養源なのでしょう。これらの鳥はケヤマハンノキやミヤマハンノキのマツボックリの小形版といった実に集まり、その中にある堅いタネをついばむ光景を見ることができます。

ちなみに、今まで記述してきた種以外で津軽海峡を渡っていると考えられるのは、クマガラとアカゲラです。その理由は、後日に譲ります。

津軽海峡を渡るカラ類

ヒガラが黄色いお腹をしているのを見たことがありますか。さしずめ「キバラヒガラ」と名付けてもあながち嘘にはならないかもしれません。これは、ヒガラがヤナギの蜜を吸うために、お腹に花粉を付けているのです。この鳥も昆虫と同じように、花粉を運ぶ役割をしています。

さて、春と言えば、ヒガラは繁殖前に、樹木の梢で、「ツピン、ツピン」と鳴いています。この鳥が留鳥であることについては、以前から何かしらの疑問をもっていました。

実は、ヒガラの群は、毎年ではないのですが、10月中旬始まり11月上旬に、函館山の麓から尾根筋に向かって樹冠を流れるかのように、さらには、山の斜面を南側にある立待岬方向からより北側にある御殿山に、それはまさに幾重にも押し寄せる波のように移動していきます。

同様な光景は、白神灯台脇の斜面上部でも見ることが出来ます。

実は、ヒガラは北海道では留鳥とされているのですが、過去の白神岬や竜飛岬での観察結果やバンディングなどから、津軽海峡を渡っていることが明らかになってきています。しかし、白神岬で放鳥するのですが、回収（かいしゅう）：放鳥されたこれらの鳥たちが他の場所で再捕獲されること）記録がないため、南方のどこまで渡っているのか、また、北方のどこから渡って来ているのかは未だに分かっていません。

そういえば、春に山を歩いていると、ヒガラの群に囲まれることがあります。ヒガラは、先に記述したセンダイムシクイとの渡島大島での出会いの時の経験と同じ状態になりました。こちらが息を凝らして静かに観察していると、タダの物として、夢中で地上に落ちている木の種子をついばんでいるのです。もうこうなると、身動きがとれないといった具合でどうしようもありません。今の時期はこういうモノか……。これは多分、渡り前の栄養補給であったのか……。

話を元に戻します。ヒガラの渡りについて考えるには、渡島大島での経験が参考になります。これもこの島でバンディングを

実施した時のことですが、ヒガラが本格的にカスミ網にかかり始めるのは午前7～8時以降で、通常の渡り鳥の動きとしては遅いようです。この島に峙をとっていれば、日の出前後には既にカスミ網に掛かり始めるのですが、そんなに早くはないため、対岸の本島から飛来してきたか、奥尻島から飛来してきたかのいずれかなのでしょう。

再度、渡島大島でのヒガラのイタヤカエデ林に群がる行動をじっくり観察すると、休息したり、樹液を飲んだり、虫を捕食したり、地上に降りて種子をついばんだりしていました。さらに、調査している者の身体の各部分に止まるものもいました。風が強くとく吹く時などは、地上にはいつくばり、キリンソウなどの種子をついばむ光景を見ることができました。これは、春に函館山での群に囲まれた出来事と変わらない状態でした。センダイムシクイもしかりです。渡島大島は樹木の発達が貧弱なので繁殖の可能性はありませんが、渡りをする小鳥類の移動群にとっては重要な中継地なのでしょう。

1988年10月31日、東京都日野市で1羽の死んだシジュウカラが発見、回収されました。この鳥の足には「025-22915」の番号が刻まれた金属の環（以後「足環」と呼ぶ）がはめられており、番号から1988年10月11日に白神岬で放鳥された個体であることが分かりました。実に600kmほどの距離を20日間で移動したことになります。さらに、翌年の5月3日に札幌市で、前年の10月12日、つまり、前述のシジュウカラの翌日に白神岬で放鳥されたシジュウカラが発見されたことになりました（表2）。

野鳥は、「留鳥」と「渡り鳥」の二つに大別できるが、一昔前まではシジュウカラはと聞かれれば、たいていの人は迷わず「留鳥」と答えるでしょう。というのは、一年中同じ地域に生息していると、一般的に考えられているからです。それなのに、どうして白神岬からはるかに離れた地点でシジュウカラが発見されたのでしょうか？

9月中旬～10月中旬頃、6時ぐらになると、シジュウカラが大群を形成し白神岬灯台上空に姿を見せます。津軽海峡へ飛び出すために集結しているのです。しばらく上空を舞った後、意を決したように、西風に乗ろうとして海面スレスレの洋上に飛び出します。海上に出ることは身を隠す場所が無いので危険を伴うためです。海面スレスレを飛ぶ行為はハヤブサなどの猛禽類の攻撃を避けるためなのでしょう。しかし、風に乗り損ねると風に押し返され再び斜

表2 白神岬で放鳥されたシジュウカラの回収記録

	放鳥日	性別	年齢	回収日	回収場所
①	1988/10/11	雌	幼鳥	→ 1988/10/31	東京都日野市程久保
②	1988/10/11	雄	成鳥	→ 1992/04/17	新潟県新潟市関屋海岸
③	1988/10/12	雌	成鳥	→ 1989/05/03	札幌市丘珠
④	1991/10/14	雄	幼鳥	→ 1991/11/07	新潟県新潟市関屋海岸
⑤	1991/09/29	雄	成鳥	→ 1992/04/09	富山県上新川郡大沢野町二松
⑥	1991/09/23	不明	不明	→ 1992/02/	秋田県岩瀬北秋田郡田代町

面を駆け上がることとなります。それを、バンディングのために、前もって斜面に対し平行に張られたカスミ網が待ちかまえます。この方法で捕らえられたシジュウカラは、金属の足環を装着し、再び空に放たれるのです。

他の場所での調査では幼鳥（ここでは生後1年未満の鳥）の比率が高いのですが、ここではシジュウカラの鳴き声を流すという誘因と、風による押し戻しでの捕獲のためか、成鳥と幼鳥という、生活経験の差はないように思われます。1988年～1991年に行った松前町にある白神灯台の脇で行った調査において、成鳥の放鳥数が幼鳥を多少上回る傾向にありました。

シジュウカラは周年同じ地域に見られることから今までは留鳥に分類されています。しかし、春と秋の渡りの特に秋の一時期に見られるシジュウカラの群で幼鳥だけが放鳥され、幼鳥だけが他の場所で回収されるのなら、幼鳥の分散と言えなくもないのですが、実際、スズメについては、『鳥類アトラス』（山階鳥類研究所 2002）によると「秋に新潟に集結するものの過半数は移動性の個体群であろう」と考えられています。しかし、こと白神岬のシジュウカラに関して言えば、スズメの例を当てはめることはできません。移動という「行ったきり」の一方の動きではなく、明らかに津軽海峡を挟んで季節的な南北を行き来する渡りをしているようなのです。これがシジュウカラの普通の行動なのか、一部の行動なのかは不明なのですが、明らかなのは札幌以南と東京以北では、渡りをしている事実です。

つまり、表2の①と③個体、白神→東京、白神→札幌の記録は、鳥類の渡りという概念からすると、1個体の連続的な移動でないのですが、白神を中継地にした渡りを行っていることを示しています。単なる幼鳥の拡散ではなく、渡りの様相を呈していることは明らかです。『鳥類アトラス』（山階鳥類研究所 2002）によると、北海道から本州の例として、北海道苫小牧市→福島県大沢野市（1例）が、本州から北海道の例として、青森県十和田市（1例）・新潟県新潟市（3例）・新潟県紫雲寺市（1例）・福井県織田町（1例）があります。ちなみに回収場所としては富山県が一番白神からの距離が長くなっています。

ここまで、成鳥と幼鳥との比較を試みましたが、性別でも9月が雄で10月になると雌が比較的多くなる傾向にあるといったように、多少違いが見られるようです。

さて、ヒガラとシジュウカラは津軽海峡を渡っていることが明らかになってきましたが、他のカラ類はどうなのでしょう。少なくともヤマガラは渡っているような気がします。なぜって？春については定かではありませんが、白神では、秋になると記録される数が多くなるからです。では、ハシブトガラはどうでしょう。少なくともこの種は、渡りをしていないと考えています。その根拠はというと、白神での記録がほとんど無いからです。

ヤマヒバリは迷鳥？

この鳥は、日本において数少ない冬鳥として渡来するようですが、北海道では普通は迷鳥とされています。ところが、函館山での放鳥記録は1988年11月に1羽が記録されたのを皮切りに、1992年、1993年、1995年、1996年、1999年のいずれも11月に記録されました。さらに、松前町の白神岬では1991年の11月19日～24日の8日間に4羽を記録して以降、ほぼ毎年のように記録されるようになりました。この鳥はカヤクグリと一緒に記録されることが多く、カヤクグリに紛れて行動している様に思われます。このように毎年定期的に記録されるようになれば、もう迷鳥ではないですね。



ヤマヒバリ

ノゴマの渡る道

ノゴマは、9月中旬から10月下旬にかけて、南への渡りの途中に道南に姿を見せます。私が1981年からバンディングを行っている函館山でも、放鳥されていますが非常に少ない種類でした。1991年を例にとると、全放鳥数40種1,071羽のうちノゴマが7羽と、全体の4%にすぎないのです。さらに、田中正彦さん（七飯町在住）の七飯町の調査でも51種3,006羽のうち101羽と函館山より多いのですが、比率的には函館山と大差はありません。ところが、当時厚沢部町で教員をされていた林吉彦さんが同町富里で行った調査では、全標識放鳥数38種2,607羽のうちノゴマが1,342羽で、全体の52%を占めていました。この年、全国で放鳥されたノゴマが1,990羽であるから、富里だけで全国の65%も放鳥されたこととなります。これは驚くべき数字です。

このことから、ノゴマは厚沢部町を、渡る途中の最も重要な通り道として選択していると考えられました。このとき、林さんが試みたことは、鳥の鳴き声を流すことが、鳥を誘引するには効果があると知り、夜中にノゴマの鳴き声を流したとのことです。さらに、カスミ網の下を潜る個体が多いことが分かると、通常より網を地面スレスレに下げて捕獲するといった方法をとりました。このことで、ノゴマの捕獲数が飛躍的に増加する結果になりました。

ノゴマがどのようなコースをたどって北から渡って来るのか、また、どのようなコースをたどり津軽海峡を渡って

いくのか、謎の部分が多く、地道な調査による結果を待たなければならなかったのですが、この方法は、他の地域でのノゴマの放鳥数の増加をもたらし、ノゴマの渡る道の解明に貢献するようになっていきます。

ノゴマの渡る道はどこだろう？林さんはこれを永年のテーマの一つとして、厚沢部町から、白神・福島町千軒に調査地を変え、その謎を追求したのです。

以上、とりとめもなく渡り鳥たちの気になる出会いを紹介してきましたが、いかがでしたでしょうか。ここで触れたように同じ渡り鳥に出会うにしても、季節ごとに行動が異なっているため、その時々で観察する楽しみ方も変わっ

てきます。さらに、観察した人によっても感動が異なるでしょう。渡り鳥のそれぞれの行動にドラマがあるのです。今からでも遅くはありませんから、1種について突き詰めて、その動きを追ってみると良いでしょう。自然と触れ合う機会を大いに持ち、そこでの出会いを大切にしてください。

最後に、私の尊敬する大切な仲間である林吉彦さんが、2010年1月21日に亡くなりました。享年72歳でした。早すぎる死といえればそれまでですが、知らせを受けたのが、ちょうどこの文章をまとめようとしているときでした。今回の文章は、林さんの存在無くして、書き上げられなかったでしょう。ご冥福をお祈りしたいと思います。

ベニヒワとコベニヒワ

美唄市 藤巻裕蔵

ベニヒワとコベニヒワは、北海道では冬に渡来する鳥である。レンジャク類、ツグミなど多くの冬鳥の渡来数は年により非常に変化する。ベニヒワもそうである。日本鳥類目録改訂第6版（日本鳥類目録編集委員会 2000）によると、ベニヒワは冬鳥であるが、コベニヒワは不規則に渡来する種である。これは後者の記録が非常に少ないためであろう。

私は帯広にいたとき、冬になると庭に飛来する鳥の標識をしていた。1987/88年の冬にはベニヒワの渡来が多く、1987年12月には13羽に足環をつけることができた。このとき捕獲した中に腰がはっきりと白い個体が1羽いた。「コベニヒワ」とおもったが、翼長を測定してみると、ベニヒワと同じであったので、この個体を「ベニヒワ」と記録した。このとき以来、ベニヒワの群れの中にいる腰の白い個体が必ずしもコベニヒワとは断定できないと思うようになった。

本誌156号に、南波（2009）が北海道大学構内でのコベニヒワの観察記録を報告している。彼はコベニヒワと同定した根拠として、渡辺・三河（2004）が示した「嘴が小さい、腰と下尾筒は白い、脇の縦斑は非常に少ない、全体的に白っぽい体色、額の赤は狭い」という特徴を挙げている。

カムチャツカの鳥類研究者 Lobkov(1979) によると、コベニヒワはベニヒワに比べて体が小型、羽衣全体の色調が非常に淡い、雄の胸が淡い（バラ色）色調、嘴が小さい（額羽から3.1~6.4、平均5.5mm、ベニヒワでは6.1~10.5、平均7.88mm）などの特徴がある。それぞれ典型的な個体をみれば、2種の特徴の違いは明らかであるが、両種とも個体差がかなりあり、雄の胸の色、背の色、嘴の大きさなどの特徴は重複するという。例えば、彼が調べたコベニヒワの標本40羽のうち、腰が白かったのは30%で、その他では

淡灰色斑のあるバラ色であったし、上述の嘴峰長でもコベニヒワの大きな値とベニヒワの小さな値は重複している。

カムチャツカ半島での分布をみると、ベニヒワが半島全域に生息するのに対し、コベニヒワはおもに北部に生息し、垂直分布でもベニヒワがおもに低標高地に、コベニヒワが高山帯に生息する。しかし、分布は重複しており、少数ではあるが交雑個体や、繁殖期には異種のつがいが見られ、その雌雄間でディスプレイが観察されたりするという。このようなことから、Lobkov(1979) は「ベニヒワとコベニヒワは隔離機構が不完全な近縁種と考えるべきである」と述べている。私は、標識のときの経験、外部形態に見られる個体差、カムチャツカでの繁殖期における2種の生息状況や繁殖生態を考慮すると、この2種を確実に識別するには、上述のいくつかの特徴のほか、捕獲して計測する必要があるのではないかと考えている。

なお、Lobkov(1979) の報告の内容について詳しくは「極東の鳥類25・スズメ目鳥類特集」（2008）を参照していただきたい。

文献

Lobkov, E. G. 1979. Biology and relation between *Acanthis flammea* and *Acanthis hornemanni* in Kamchatka.

Biologicheskii Nauki 1979, 11:64-68. (訳：極東の鳥類25, スズメ目鳥類特集, 100-104.)

南波興之. 2009. 北海道大学構内で観察されたコベニヒワ. 北海道野鳥だより (156):3-4.

日本鳥類目録編集委員会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.

渡辺修三・三河一郎. 2004. 考える識別・感じる識別. 赤い鳥. *Birder* 18 (1):99-105.

野幌森林公園雑感—フクロウとクマゲラ—

江別市野幌 松原寛直

今から二十余年前、あの広い森の中、特にコースは定めず、天気模様やその日の体調を考慮して、適当に夏は黙々と歩き、冬はクロカンのスキーを楽しんでいました。その頃は野鳥にも全く興味がなく、只々歩き回っているだけでした。

そんなある日、大沢園地の四阿（あずまや）で昼食のオニギリを頬張っていた家内と私の目の前の木に、頭の赤い黒い鳥が飛んで来て、木を突き始めました。なにあの鳥は？ たしかクマゲラ？ とか言ったかなあ……。家に帰り子供の図鑑を見ると、天然記念物のクマゲラと出ており、野幌の森にも棲息しているんだとわかった様な……。こんなレベルでした。

その後歩く度に、“クマゲラにまた出会えるのかなあ” “あの小さな鳥なんだろう？” と段々鳥に目が行くようになり、そんな時、家内が新聞で北海道野鳥愛護会というのが野幌で探鳥会（鳥でも探す集まりなのか？この程度の認識でした）を無料で行うという記事を見つけました。野幌開催の時だけ何度か参加しているうちに、自由で和気藹々の雰囲気がとても印象に残り、入会しました。

相前後して、森の中で良く出会う人（その時は挨拶程度）と偶々森のとあるベンチで一緒にになり、一言二言、言葉を交わすうちに、その方がこの森で撮った野鳥の写真を見せてくれました。その中にフクロウの写真があり、非常に珍しかったので、失礼をかえりみず恐る恐る購入したい旨を伝えたと、その方は笑いながら証拠写真程度だからと言って2枚くれました。これがきっかけとなり、森で出会うと言葉を交わすようになりました。それから暫くして“フクロウが居るから見せてあげる”と言って森の奥へ連れて行ってくれ、洞にいる1羽を見せてくれました。これがこの森のフクロウとの出会いとなりました。

フクロウは森の奥にひっそりと棲息しているものとばかり思っておりましてところ、7～8年前頃、会員の皆様なら既にご存知の大沢口のハルニレの洞に出現し、こんな住宅地の傍にもと驚かされました。毎日あまりのギャラリーの多さに、口の悪い仲間は“観光フクロウ”だと言って苦笑いしておりました。森の古い先輩の話では、十数年前から特に2月頃に姿を見せていたとのこと。その頃はまだ森も今のように整備されてはおらず、知る人ぞ知る穴場で、一握りのマニアが写真を撮ったりしていましたが、マスコミに登場するようになりダメになったと嘆いておりました。本当に段々この木に来なくなり、交流館の所員や森の仲間と色々情報を精査すると、昨シーズンは3回程度しか出現しなかったようです。因みに、森全体では昨シーズンは（こ

れは観察記録とか調査といったものではないことをお断りいたしますが）毎月どこかに姿を見せておりました。それ以前は、秋に姿を見せて冬を越し、春の子育てが終ると森の奥にでも入るのか、殆ど姿を見せることはありませんでした。仲間とは本当に昨シーズンはよく見ることができたと、情報交換しながら語らい、写真を見ながら共に楽しんでおります。

愛護会探鳥会の冬コースに限っても、少なくとも3羽は確認されております。フクロウの数が増えたのか、同じ個体があちこち移動しているのか、真偽の程はわかりませんが……。いろいろ推測しながら語り合うのも楽しみの一つです。



野幌森林公園のフクロウ

フクロウと並んで人気を二分するクマゲラも、昨年の11月頃から森の広範囲で目撃されており、「どこそで見た」、「写真を撮った」、「声を聞いた」等々の情報も多く、喜ばしい限りです。今年、元日から森に入った仲間の一人は、1日、3日、4日と続けて確認できたとのこと。例年だと、私もそうですが、年に2～3回姿を見ることができれば上出来であったのに、今年は例年の1年分の元を取ったような気分だと、大喜びで写真を見せてくれました。

私も昨年の11月から今年の1月20日迄の間に10回以上見ており、こんなことは初めてです。いずれにしても、フクロウ、クマゲラ等々、今日はどこそにいたとの情報をもとに、森の中をあちこち歩き回り、出会った時の感激は一入（ひとしお）です。たとえ出会えなくても、春の気持ちの良いオゾンを胸一杯吸い、森林浴を楽しみ、冬はまた凜とした冷気の中を歩くのも身が引き締まり、心が洗われる思いがします。

私にとって森は心を和ませてくれる憩いの場であり、森の仲間とは、我々は慢性森林依存症？だと言って笑いながら、共に森に入っております。

風車と野鳥

北海道鳥類保全研究会(代表) 東京農業大学生物産業学部 白木彩子

新エネルギー導入策による推進力を背景に、日本でも風力発電施設が急増している。たとえば、風車の総数は1990年では全国で9基にすぎなかったが、2009年3月末では1,517基となっている(NEDOエネルギー対策推進部HPより)。とくに北海道は268基を保有しており、設置基数、出力ともに全国第一位となっている。

クリーンエネルギーとして、また永続的な資源として風力発電は世論の支持を受けているが、その一方で、環境や人間生活に対する負の要素についても指摘されている。それには騒音や低周波による人体への健康被害、景観へのダメージなどもあるが、バードストライクをはじめとする野鳥への悪影響も大きな問題である。ここでは、この影響についての概略と実際に私たちの身近に起こっているバードストライクの現状について紹介する。野鳥を愛する皆様にまずはこの問題について知っていただき、今後の解決策について共に考えていただければ幸いに思う。

風車による野鳥への悪影響

風力発電施設は、効率よく稼働するために安定した平均風速が期待できる場所、たとえば開けた高台や海岸部、岬などに造られる。このような場所の多くは、鳥類の渡りルートであったり、繁殖や越冬のために利用される場所であることが多い。つまり、風車の建設に好適な場所と野鳥にとって重要な生息地が一致してしまうのだ。そのため両者の間に軋轢が生ずるといのが、この問題の基本原理である(写真1、写真2)。

風車による鳥類への悪影響には、①衝突事故(バードストライク)、②攪乱による強制移動、③障壁効果、④生息地の消失・悪化がある。①において、鳥類は風車のロー



写真1 サハリンから飛来するオオワシなど、多数の渡り鳥の玄関口となる宗谷岬の風力発電施設。反対運動も叶わず、国内最大級の施設が建設された。

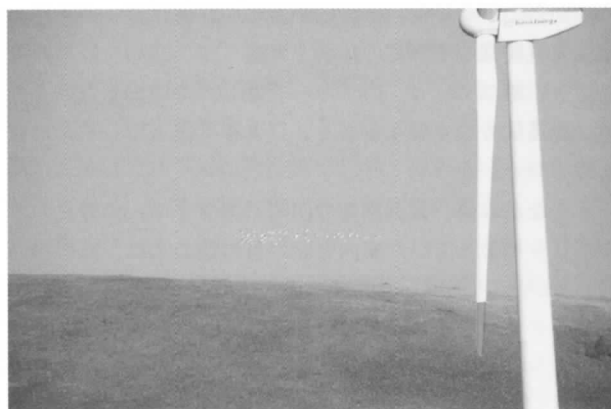


写真2 宗谷岬の施設付近を通過するオオハクチョウの群れ

ター部(羽根の部分)のみならず、支柱や電線、気象観測柱などにも衝突する。既存の報告によれば、風車一基辺りの年間の鳥類の衝突数は、周辺に生息する鳥類の種数や地形や景観の特徴、施設の規模、風車の配列や形状などの影響をうけ、平均0羽から23羽まで施設によって異なっ



写真3 鳥類の営巣地と餌場との間に列状の風車が建設された施設

ている。②は建設工事や風車の稼働のほか、保守点検作業や車輛の通行などが攪乱となってその生息地から鳥類を排除してしまうことで、③は立ち並ぶ風車群が鳥類の移動を妨げたり、飛翔通路を変更させることである(写真3)。④は、施設には風車だけでなく保守点検用の道路や変電施設、管理小屋等も作られることが多いため改変面積も大きくなり、鳥類にとって好適な生息地ではなくなるケースである。

国内とくに北海道の状況

では、国内、とくに北海道で実際にバードストライクは起こっているのだろうか?北海道鳥類保全研究会による死

体回収調査では、トビ、オジロワシ、ノスリの猛禽類、カラス類、カモメ類のほか、クロガモやカルガモ、ウミスズメ類が確認されている。小さなものでは、アオジやホオジロなどの小鳥類や、コウモリも回収した。このように、非常にさまざまな鳥類種が衝突死していることがわかってきた。また、長寿の猛禽類、特に希少種では風車による死亡率の増加が個体群に重大な影響をもたらす可能性があることから、特にオジロワシの衝突事故が多いことは非常に深刻な問題といえる。

北海道で衝突死したオジロワシは2004年以降、23個体にも上る(写真4、5)。もともと風力発電施設に立ち入ってウロウロする人は少ないから、発見されていない死体はもっとあるだろう。これらのオジロワシが回収された場所をみると、半数以上が日本海側に位置する苫前町にある複数の施設であった。なぜ、苫前町に集中しているか。考えられることが三つある。まず立地地形で、この地域の風車の多くが海岸段丘上に位置していることに関係があるようだ(写真6)。段丘周辺では季節を問わずオジロワシが生息し、斜面風を利用して海岸部を段丘に沿ってなめるように(恐らく餌を探しながら)飛翔する姿が観察されることから、たとえば採餌に集中しているオジロワシが風に煽られて風車に衝突している可能性がある。二つめは衝突頻



写真4 風車の下に落ちていたオジロワシの若鳥の死体



写真5 風車によって切断されたと考えられるオジロワシの片翼



写真6 海岸線の段丘上の風車

度の高い風車が国道わきにあり、敷地も立ち入り禁止ではないことから、死体が発見され易いとも考えられる。三つめは、本地域では北海道鳥類保全研究会のほか、発電事業者などによる死体回収調査が行われており、この調査頻度の高さが発見に寄与している可能性である。逆にいえば、他の施設ではほとんど調査が行われていない状況であるから、調査を行えばもっと多くの死体が発見されるかもしれない。

また、衝突死体の確認された施設の規模であるが、半数以上が5基以下の小規模施設で発見されている。つまり、衝突事故は施設の風車数に関わらず、鳥類の生息状況や立地条件などによって発生し得ることがわかる。

オジロワシ以外の希少猛禽類の事故としては、2009年11月に道南の瀬棚町にある施設ではじめてオオワシの衝突死体が見つかった。また、北海道外ではあるが、2008年の秋には岩手県釜石市にある施設で日本では初めてイヌワシの衝突死体を確認された。この発電所は建設に伴う事前の環境影響評価において、同地区にイヌワシの営巣地はなく飛来数も少ないと判断して着工された経緯がある。

悪影響を回避するために

風車による野鳥への悪影響を回避するためには、1) 鳥類の重要な生息地に建設しない。2) 建設計画地の鳥類や生態系について調査し、客観的な影響評価を行った上で建設の可否や建設方法を検討する。3) 衝突しにくい風車の形状や配列、鳥類が風車を認識しやすくなる工夫(ブレードへのペイントや照明装置の設置などの効果が検証されている)などの技術改革、があげられる。2)については、風力発電施設は今のところ国の環境影響評価法の対象事業となっていないため(環境省によれば、近い将来対象となるらしい)、多くは建設が前提となった不十分な調査・評価しか行われていない。3)についてはまだ時間がかかりそうなことや、主に衝突のみに対する回避策であることから、現段階では1)が最も確実な影響回避策といえる。

絶滅危惧種シマアオジをどう守るか(6)

IUCNのレッドリストに掲載されたこと

北海道環境科学研究センター自然環境部 玉田 克巳

2008年10月に、シマアオジが、IUCNのレッドリストに Vulnerable (環境省 RDB の基準に従えば、絶滅危惧Ⅱ類に相当する。以下、IUCN のカテゴリーを環境省 RDB に相当する訳語で記す) に指定されたことは以前の原稿でも紹介した。IUCN とは、International Union for Conservation of Nature and Natural Resource の略で、日本語では国際自然連合と訳されている。1948年に設立され、国家、政府機関、非政府機関で構成された国際的な自然保護機関である。知床がユネスコの世界自然遺産に指定される際に、その評価のためにデビット・シェパード氏が来日したことは大きくニュースに取り上げられたが、このシェパード氏が所属しているのが IUCN である。そして、この IUCN が世界中の生物を対象に、レッドリストを策定している。

とはいっても、IUCN のレッドリストのうち、鳥類の部分については、IUCN が自ら策定しているのではない。バードライフ・インターナショナルという別の組織が策定し、このリストがそのまま IUCN に採用されるという仕組みになっている。バードライフ・インターナショナルとは、1922年に発足した国際鳥類保護会議 (ICBP) が前身で、世界最初の国際環境 NGO である。日本野鳥の会が日本のパートナー団体になっている。野鳥誌などに、IBA (Important Bird Area) と称して、鳥類の重要な生息地の選定状況などが紹介されているが、この IBA の選定作業はバードライフ・インターナショナルの事業として展開されているものである。

さて、バードライフ・インターナショナルのホームページでは、レッドリスト掲載種の生態や選定の根拠などが紹介されており、シマアオジについても、A4版に印刷して3ページ程度になる内容が記述されている(ホームページの所在は末尾に掲出)。また IUCN のホームページも、最近、内容が更新されたようで、レッドリスト種の生態などの情報が掲載されるようになったが、記述内容はバードライフ・インターナショナルとほとんど同じである。今回はこのホームページから、シマアオジがどのような評価を受けているかを紹介したい。

このホームページでは、世界中のシマアオジの個体数は120,000~1,000,000羽、生息面積は15,700,000km²と推定しており、個体数の動態は減少傾向と記載されている(算定根拠はよくわからない)。絶滅危惧Ⅱ類に指定した根拠として、個体数の減少が著しいと書かれている。しかし、具体的にどの地方でどの程度減少しているというような情報は書かれていない。減少の原因としては、越冬する地域

での人為的捕獲によるもので、罠入りしている群れを脅して、カスミ網で捕獲すると書かれている。捕獲されている地域は、当初は中国南部の狭い地域で行われていたが、最近では広がっていると書かれている。捕獲行為は地域によっては違法であるが、毎年百万羽を超える個体が捕獲されているとある。捕獲の目的は、食用のほかに、オスをマスコットとして販売するとある。このマスコットとは、剥製にしたもので、家に福を呼ぶものという迷信があるようである。

このホームページには、根拠となった情報源を文献リストとして記述しており、20編の引用文献が紹介されている。しかし、1編を除いて、すべてが個人書簡、つまり公開されていない情報である。公開されている1編についても、この連載でたびたび紹介しているホオジロ類の図鑑である Byers et al.(1955)であるので、生態については参考になるものの、減少実態について参考になるものではない。シマアオジが減少していることや、その原因となることの根拠は個人書簡をもとに記述されているということである。権威ある IUCN (この場合はバードライフ・インターナショナルと考えるべきか?) のレッドリストも、その根拠をたどっていくと、科学的に客観性が裏づけられた論文などの情報が基になっているわけではないことが伺える。

献者とか情報提供者などと訳すべきか? この短いホームページを20人で分担執筆しているとは思えないので、情報提供者と訳した)。しかし、これらの中に、日本人らしい名前は見当たらない。つまり、情報の基となっているのは、かなりの部分が日本以外の情報である可能性が高い。唯一、引用文献や情報提供者のリストの中に Chan 氏の名前が出てくる。以前、この連載のなかで、シマアオジが中国で食べられていることを、2つの文献をもとに紹介したが、中国で保護鳥となったシマアオジの摘発事例などを執筆したのが Chan 氏である。だから、北海道の状況も、おそらく Chan 氏によって、ある程度は(かなり?) 反映されているものと思う。

このホームページで注目したいことは、保全対策の進捗状況や保護への提言があることである。保全対策としては、いくつかの IBA サイトでモニタリングとして個体数カウントが行われているとある。しかし、具体的なデータへのリンクはなく、どのような結果が得られているのか、私自身まだ充分調べることができていない。保護への提言としては、減少実態を把握していくために、広域にわたるモニタリングプログラムを構築することが必要で、モニタリングプログラムは繁殖地、中継地、非繁殖地で実施すること

が重要である。また、食用やマスコットとして捕獲されることによって、生息数が減少していることを知らしめるための運動を起こすことも必要である。越冬地として重要な生息環境を正確に調べ、まだ越冬地として多くの鳥が利用している地域を保全することが重要であるということが提言されている。

さて、今回はIUCN (バードライフ・インターナショナル)のホームページの中身を紹介してきた。ホームページの内容は、一見するとやはり、中国南部で捕獲されているということを重く見ていることが伺える。保護への提言もある。しかし、細かく見ていくと、捕獲や減少の実態を示す根拠は、まだ少ないと感じる。ただ、IUCNのレッドリストに掲載されたということは、減少しているということが国際的にも認知されたということである。もし減少の原因が、このホームページで示唆されているように、国内ではなく海外にあるとすれば、IUCNのレッドリストに掲載されたことは心強いことである。ただ、このホームページは、IUCNのサイトも、バードライフ・インターナショナルのサイトも、かなり下層にある。わざわざシマアオジを目的

に検索していかないとたどり着けない。シマアオジが減っていることを、国際世論も含めて、もう少しアピールしていかないと、事態の改善には結びついていかないように感じている。

バードライフ・インターナショナルのシマアオジに関する記述のホームページアドレス

<http://www.birdlife.org/datazone/species/index.html?action=SpCHTMDetails.asp&sid=8954&m=0>

検索方法

英語でBirdlife Internationalを検索し、まず公式サイトに入る。左側にData Zoneの入り口があり、このなかのSearch Speciesへ進む。Common name (種名)にシマアオジの英名Yellow-breasted Buntingと入力すると検索の結果が得られ、ここの英名をクリックすると、今回紹介したホームページにたどりつける。

文 献

Byers C, Olsson U & Curson J (1955) Buntings and Sparrows. Pica Press, East Sussex.

デジカメ今昔

札幌市南区 小堀 煌 治

フィルムカメラとデジタルカメラについて何か書いてくれと、突然編集幹事に言われた。困ってしまったが、多分幹事の意図はあの人は「デジカメはどうも使いづらい、画質が気に入らない」など文句ばかり言っているのにデジカメを使っている。どうも節操がない、ひとつ言い訳を書かせてみよう、こんなところだろうと考えた。

私は新聞社に勤めていたので報道カメラマンとの付き合いもあり、報道カメラの変遷も横目で見えてきた。一眼レフのデジカメが登場したのは20年くらい前だったろうか。その頃のフィルムカメラは格段に進歩して価格も安くなり、まさにフィルム写真の全盛期だった。それに引き換え、一眼レフのデジカメは価格が250万円、画素数は100万画素(現在は1,000万画素以上)で画質が悪い。決定的だったのはタイムラグ、「ハイチーズ」とにっこりした瞬間を撮ったのにできた写真は笑っていない。写るタイミングが遅れてしまうのだ。これではとても使い物にならない。野鳥の生態写真など撮れるものではない。その一方、デジカメには大きな利点があった。まず、写した結果がすぐに分かる、手間のかかる現像が不要、大きなスペースを取る暗室もいらない。しかし、カメラマンや写真愛好家は見向きもしなかった。

私が育った鉾山は当時としてモダンなムードがありカメラの愛好家が多く、自宅に引き延ばし機を持ち、フィルム現像から焼き付けまで自分でやっていた。そんな環境だっ

たのでカメラが欲しかったのだが、子供にカメラを買うお金などない。少年雑誌の付録にカメラが付いていることを友達に教えられ、発売を待ちかねて買ったのだが、付いていたのは紙の組立カメラと怪しげなフィルム、現像薬まで付いていた。はりきって写してみたのだが、影のようなものがボンヤリ写っているだけだった。

中学生の頃には「スタートカメラ」など、子供向けの安価なカメラが出てきた。絞りは固定でシャッタースピードはB、1/25、1/100だけ。極めてシンプルなものだが、条件が良ければ十分に写るカメラだった。大人から現像液をもらってきてフィルム現像は押し入れの中。パットに現像液を入れ、真っ暗な中でフィルムを均等に動かす、職人的かつ原始的な現像法だった。蛍光塗料の時計など無いので歌を歌って時間を計った。のどかな時代だった。記憶に残っているのは洞爺丸が沈んだ台風19号の夜、友達と押し入れの暗室にこもり、気がつくと外は暴風雨、友達は帰るに帰れず、連絡もできず無断外泊となった。

こんな事をして少年時代を過ごした。一眼レフカメラを手に入れたのは社会人になってから。野鳥にも興味を持っていたので、日本野鳥の会や愛護会に入った頃から野鳥の写真の撮り始めた。フィルムは専らモノクロだった。カラーはもちろんあったが、最初の頃はリバーサル(スライド用)。地方には現像所がなく、郵送で東京送りだった。フィルムの価格に現像料金が含まれていて、高価で時間が経

つと退色してしまう。やがてネガカラーが登場して、一般の人にも普及しカラー全盛期となった。カメラの性能も急速にアップし、フィルムの巻き取りが手巻きからオートワインダになり、連続撮影が可能になった。生態写真が格段に良くなった。

こんな時代になっても「やはり写真はモノクロだ。モノクロでなければ表現できないことがある」など色々理屈をつけてはモノクロにこだわっている人が随分いた。私もその頃コダックのモノクロフィルム「トライX」という高感度で微粒子というフィルムを使っていた。これも製造を中止するというので、あわてて大量に買い込み、劣化を防ぐため冷蔵庫にしまった。しかし、その頃から国産のカラーフィルムが急速に進歩し、結局、冷蔵庫のフィルムを使うことはなかった。

こんなふう長い間カメラを趣味にしていたので、使っていたレンズに合う一眼レフのデジカメが出た時にはすぐに買った。有り余る機能を使いこなすことが出来ず、違和感もありあまり使うことがなかった。

世の中の風向きがだんだん変わってきた。気がつけばリバーサルフィルムの現像所は不便な場所に追いやられ、これまで2時間で出来た現像が1日かかるという。デジカメの性能も飛躍的に進歩した。時間的遅れどころか1秒間数枚の連写まで可能になり、手ぶれ防止まで装備され、重い三脚が不要になった。フィルムも不要、現像料もかからない。「参りました」と言わざるを得ない。フィルムに拘るのは古いものへの郷愁で、デジカメに色々文句をつけるのは結局“負け犬の遠吠え”だったのだろう。

あるプロカメラマンは「仕事でいやいやデジカメを使うが、どうも好きになれない」、「デジカメは勝手に自動的に撮ってくれるので面白くない」、「写真が面白いのは写っているかどうか、出来栄えはどうかと、ドキドキして現像するのが楽しみなのに、デジカメは撮ってすぐに結果が分かるのでつまらない」と言っている。愛護会の幹事会で「音楽でいえばデジカメはCD、フィルムはレコード、深みや軟らかさが違うのです」こんな話が出たことがあり、言い得て妙だと思った。レコードの熱烈なファンがいるように、デジカメとは一味違うフィルムのファンも長く残るような気がする。

結局、写真とは何なのか。写真集『写真記録ベトナム戦争』などや著書を多数出している、敬愛するプロカメラマン石川文洋氏は、著書『写真は心で撮ろう』の中で、「自分はキャノンの安いカメラを使っている。各メーカーのレンズやカメラに大差はない。好みに合ったものを使えば良いのだ。カメラがこれだけ良くなればプロもアマも技術的には差はない。自分もほとんど「全自動プログラム」で撮っている。写真の重要さは「自分は何を表現したいか、なにを訴えたいか、結局心で撮るものだ」と締めくくっている。

デジカメが進歩し安価になり、フィルムも不要。誰でも簡単に野鳥の写真が撮れるようになった。「SLブームの次は野鳥ブームが来る」と言われていたが、本当にそうだった。それが高じてフクロウなどにカメラマンが異常に群がり、鳥にストレスを与える光景を目にする。モデルが嫌な顔をしたら、良い写真など撮れる訳がない。これからも自戒し、野鳥写真を楽しみたいと思っている。



野幌森林公園

2009. 12. 6

小樽港

2010. 1. 17 立田 節子

【記録された鳥】トビ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、ウソ、シメ、カケス、ハシブトガラス 以上21種

【参加者】井上公雄、今村三枝子、栗林宏三、黒沢麦子、後藤義民、小西美美枝、小堀煌治、品川睦生、白澤昌彦、高田征男、武沢和義、辻 雅司・方子、道場 優、戸津高保、中正憲信・弘子、中村 隆・廣子、成澤里美、畑 正輔、辺見敦子、早坂泰夫、広木朋子、松木ゆう子、室野文男、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子 以上29名

【担当幹事】白澤昌彦、武沢和義

札幌駅からバスでの小樽港探鳥会に、友人に誘われて石狩の大雪の中より3人で参加させていただきました。今日の天気では「どうなるのかしら」と心配でしたが、小樽には雪が少なく、びっくりしている内に晴れ間がのぞき、安心しました。水鳥や海鳥は全くわかりませんが、何に会えるか楽しみでした。幹事さんやベテランさん方から鳥の見分け方などを教わったり、スコープを覗かせていただきました。「今見たのはこの鳥だよ」と本を開いて確実に解るように教えて下さり、とても覚えやすくてありがたかったです。自分の小さな双眼鏡では何の鳥なのか見分けが付きませんでした。遠くにいるアビ、カンムリカイツブリなどをスコープで覗かせてもらい、はっきり間近に見る事ができ、もう嬉しくて感動しっぱなしでした。シノリガモ数羽がぐんぐん近付いてきて、まるでショーでも始めたようで、楽しませてもらいました。ハヤブサには感動でした。黄色

い口と目の縁、腹と尾の下面に黒の横斑、もみ上げまで、はっきり、じっくり見る事ができ、こんなすばらしい巡り合わせに感謝感謝です。シンキローまで見る事もでき最高に幸せな一日をありがとうございました。バスに乗り込んで来られる会員お一人お一人の顔が、にこやかに満足感に満ちて、幸せ気分のオーラを感じました。幹事さん、会員の皆さん、今日は本当にありがとうございました。また、こんなすばらしい皆さんにお会いしたいです。

【記録された鳥】アビ、オオハム、ハジロカイツブリ、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、マガモ、キンクロハジロ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、トビ、オジロワシ、オオワシ、ハヤブサ、ユリカモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミガラス、ハシブトウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、アカゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、シジュウカラ、ハギマシコ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上36種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、井上詳子、岩崎孝博、白田 正、梅木賢俊、大橋 晃、大町欽子、岡部良雄・三冬、北山政人、久野裕之・早苗、栗林宏三、坂井伍一・俊子、佐々木充人、品川睦生、清水朋子、白澤昌彦、鈴木幸弥・順子、高橋良直、高橋きよ子、高屋敷征子、立田節子、田中志司子、田中 洋・雅子、辻 雅司・方子、中正憲佑・弘子、成澤里美、西尾京子、浜野チエ子、濱野由美子、樋口孝城、山本昌子、横山加奈子 以上40名

【担当幹事】岩崎孝博、梅木賢俊、田中 洋

野幌森林公園

2010. 2. 7

【記録された鳥】コゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、ツグミ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ 以上9種

【参加者】小西美美枝、後藤義民、佐々木容子、竹田芳範、早坂泰夫、畑 正輔、辺見敦子、松原寛直・敏子、横山加奈子、吉田慶子 以上11名

【担当幹事】松原寛直、横山加奈子

鳥民だより

◆総会のご案内

日 時：平成22年4月9日(金) 午後6時30分

場 所：かでの2・7 320会議室

総会終了後に懇親会を予定しています。会員の皆様、多数ご参加下さい。

◆野鳥写真展と写真募集のお知らせ

<野鳥写真展>

期 間：平成22年4月27日(火)～5月9日(日)

場 所：光映堂2階ギャラリー

札幌市中央区大通4丁目 電話 011-261-0101

なお、展示作業は4月26日の午後5時から、撤去作業は5月9日の午後5時から行う予定です。お手すきの方はご協力願います。

<写真募集>

写真は原則として道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前、撮影者、撮影年月、撮影場所を添付して下さい。送付は光映堂の小林店長まで。4月26日に直接持参する場合は、事前に連絡願います。出展者には、光映堂の本店と地下街店で使える商品券(2,000円分)を進呈します。

問い合わせは 小堀煌治 電話 011-591-2836

(午後7時～10時)

【新しく会員になられた方々】

(株)緑生研究所北海道支所 札幌市白石区

立田 節子 石狩市

西尾 京子 石狩市

—宿泊探鳥会のお知らせ— 旭 岳

平成13年(2001年)以来2回目の旭岳探鳥会です。旭岳温泉周辺ではコマドリ、ベニマシコ、ホシガラスなど、ハイマツ帯ではカヤクグリ、ノゴマ、ギンザンマシコなどが期待されます。1日目は姿見駅周辺で、2日目は温泉周辺で探鳥の予定です。高山の花も楽しめます。

以下の要領で行いますので、どうぞご参加下さい。

月 日	7月3日(土)～4日(日)
集合場所	札幌駅北口「鐘の広場」
集合時刻	3日午前7時
札幌帰着	4日午後6時30分頃
定 員	45名
参加費用	20,000円(バス代、宿泊代、旭岳ロープウェイ料金など。食事は3日昼食から4日昼食まで)
宿 泊	大雪山白樺荘(電話0166-97-2246)
申込み先	佐々木 裕 宿泊探鳥会担当幹事 (電話 011-596-2660)

※ 6月1日(火)午前9時から電話で受け付け、定員になり次第締め切ります。

旅行代金 申込み終了後から6月15日までに下記口座に振り込んで下さい。

北洋銀行 西町支店 普通預金

口座名 北海道野鳥愛護会

口座番号 3539821



- ☀ 探鳥会は悪天候でない限り開催します。
- ☂ 双眼鏡などの観察用具、昼食、筆記具、野鳥図鑑などをご持参下さい。
(探鳥地や当日の天候に応じて、防寒具、雨具、長靴などをご用意下さい。)
- ☂ 公共交通機関を利用される場合には、事前に時間などをお確かめ下さい。
- ★ 探鳥会の問い合わせ
(社) 北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日祭を除く)

開催日	探 鳥 地	集合場所及び集合時刻
4月11日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 午前9時30分
	地下鉄東豊線環状通東駅から、中央バス北札幌線東69番・東79番。「モエレ公園東口」下車、徒歩15分。公園内を歩き、カモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原の鳥、林のカラ類などを楽しまします。	
4月18日(日)	宮 島 沼	湖畔 午前10時
	JR岩見沢駅前発、又はJR石狩月形駅前発 中央バス(月形行き又は岩見沢行)「大富農協前」下車、徒歩10分。北帰途中のマガンたちが宮島沼に集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。	
4月25日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	JR新札幌駅発 夕鉄バス(文京通西行)「大沢公園入口」下車、又はJRバス(文京台循環線)「文京台南町」下車、徒歩各5分。夏鳥たちがほほ出揃う頃です。新緑に染まる森を目を凝らしながら、耳をすましながら歩きます。	
5月5日(水)	藤 の 沢	白鳥園 午前9時
	札幌駅発、又は地下鉄真駒内駅発 定鉄バス(定山渓行又は豊滝行)「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。白鳥園の裏山(藤野マナスル)をクロツグミ、ウグイス、オオルリなどの声を聞きながら巡ります。	
5月9日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	交通機関は、4月25日の案内を参照してください。 夏鳥が勢揃いします。木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえざるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月16日(日)	千 歳 川	さけますふ化場手前の橋付近の広場 午前8時
	交通機関はありません。自家用車の相乗り希望者は、幹事に相談してください。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさん夏鳥が見られます。ヤマセミもきっと楽しめます。	
5月23日(日)	鶴川河口	鶴川温泉四季の館 駐車場 午前9時30分
	札幌駅発、又は地下鉄大谷地駅各ターミナル発 道南バス浦河行(ベガス号)「四季の館前」下車。鶴川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。運が良ければ「大当たり」になります。	
5月30日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前 午前9時10分
	JR千歳線 植苗駅下車。 道路沿いや林中の鳥の囀りを聞きながらウトナイ湖へ向かいます。湖畔草原の鳥たちを楽しみます。	
6月5日(土)	平和の滝(夜の探鳥会)	平和の滝 駐車場 午後6時30分
	地下鉄琴似駅発 JRバス(西野平和線)「平和の滝入口」下車、徒歩20分。 ヨタカ、コノハズク、マミジロなどの声、夜ならではの探鳥です。懐中電灯や防虫剤の用意をお願いします。	
6月13日(日)	東 米 里	東米里小中学校正門 午前9時
	地下鉄菊水駅発 JRバス(米里線)「東米里小学校前」下車。 周辺の草原もだいぶ荒れてきましたが、オオジシギやカッコウはまだまだ見られそうです。	
6月20日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	交通機関は、4月25日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい、子育ての季節です。初夏の花たちも咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月27日(日)	福 移	福移小中学校前 午前9時
	地下鉄環状通東駅発 JRバス(北札幌線)「福移小学校通」下車、徒歩5分。 石狩川堤防内外の草原や、石狩川・豊平川合流点の鳥を楽しみます。カワセミのダイビングも期待されます。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
 〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465
 HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>